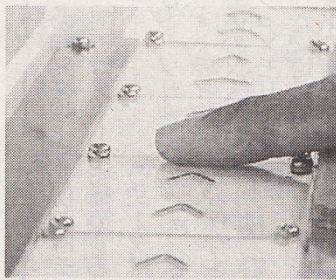


「く」の字の膨らみに指先で触れてもらい、アルツハイマー病かどうかを診断する装置を、岡山大学の呉景龍教授と同大病院の阿部康二教授らが開発した。今の診断法よりも記憶、認知能力を正しく判別できるとみる。

### アルツハイマー



一つの「く」に3秒間触れてもらい、次の「く」とど

## 「く」の字識別で診断

ちらが大きく開いているか答えてもらう。これを十数回繰り返す。検査時間は約15分。

岡山大病院で平均71歳の37人に試したところ、健康者は10度弱の開きの差を区別できたが、アルツハイマー指で触れて「く」の字の開き具合の差を答える

### 岡山大 中国で臨床研究

「病だと22〜23度の差になるまで分からなかった。近く中国の北京大病院で600人を対象に臨床研究を始める。スウェーデンでも臨床研究を計画中。国際的なデータを集め、有効性を検証する。

現在、アルツハイマーの診断は米国で開発されたアンケート方式が主流。質問内容が言語や教育レベルなどに依存し、客観性に欠けると指摘されている。